令和八年度入学試験問題（文学部）

現代の国語
言語文化
論理国語
文学国語
古典探究

（注意事項）

一、問題冊子は指示があるまで開かないこと。

二、問題冊子は十六ページ、解答紙は四枚あります。「始め」の合図があったらそれぞれを確認すること。

三、各解答紙の二箇所に受験番号を記入すること。

四、受験番号は、裏面の記入例にならって、マス目の中に丁寧に記入すること。

五、解答はすべて解答紙の指定欄に記入すること。

受験番号の記入例

A	B	D	E	G	H	I	K	L	M	P	S	T	W	Z

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9

現代の国語

言語文化

論理国語

文学国語

古典探究

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（45点）

著作権保護の観点から公開しません。

著作権保護の観点から公開しません。

著作権保護の観点から公開しません。

著作権保護の観点から公開しません。

（野口雅弘『中立とは何か　マックス・ウェーバー「価値自由」から考える現代日本』による。ただし、問題作成の上から本文の一部を改めた。）

（注）信条倫理と責任倫理――ウェーバーによると、信条倫理は自分が信じるままに行動し、結果を顧みずにその責任を社会や神に帰す態度であるのに対し、責任倫理は行為の結果を予見し、結果の責任を他者に転嫁することなく自らが負おうとする態度。

wertfrei――「価値自由」のドイツ語表記。

シンギュラリティーズの時代――大量生産と官僚制を特徴とした近代に対して、現代は個人が比較不可能な、個別性によって特徴づけられる時代になっているという意味。

問1 傍線部A「対立の契機が社会から丁寧に取り除かれてきた」とあるが、本文中でその具体例を述べている箇所を一〇〇字程度で抜き出し、その最初と最後の一〇字を答えなさい（句読点を含む）。

問2 空欄 X には、朝井リョウの小説『死にがいを求めて生きているの』の引用文が入る。その引用文として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

（ア）良く言えば治外法権的な、包み隠さず言えば浮いた存在

（イ）他者貢献でも自己実現でもなく、自分自身のための生命維持装置としてのみ、存在する人

（ウ）何もないところに無理やり対立を生んで、やっと、自分の存在を感じられる子

（エ）この世の対立の源を殲滅（せんめつ）させるための戦士

（オ）対象自身ではなく、対象の背景によって、自分の立ち位置を決める人

問3 傍線部B「対立を回避し、政治的に中立であろうとすることは、すでに政治的な態度である」とあるが、なぜ「対立を回避し、政治的に中立であろうとすること」が「政治的な態度」と言えるのか、その理由を説明しなさい。

問4　傍線部C「マックス・ウェーバーの価値自由」とはどのような考えか、本文全体の論旨を踏まえて説明しなさい。

問5　傍線部D「とても仲のよい誰かとは異なる社会を自分は望んでいる、という事実の辛さに耐えること。」とあるが、なぜそのような「辛さに耐える」必要があるのか、その理由を説明しなさい。

問6　傍線部E「現代の政治教育の問題のいくつかが党派性をうまく扱えないことに由来している」とあるが、うまく扱えない「党派性」とは何か、「党派性」の意味を明確にしつつ、本文で言及された以外の具体例を一つ挙げて、説明しなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（30点）

ふるき人の語らく、むかし安倍貞任・宗任といふもの叛ける時、源頼義朝臣、軍の君として陸奥に下り給ひぬ。従ふ人多かる中に、近江のつはもの日置九郎が馬のかざり、その身のよそひ、①言ふばかりなくうるはしうて出たるを、人みな褒めたたへしに、朝臣は御気色あしうて見え給へれX、九郎いぶかりながら、興なげに御前を退きぬ。

明くる日、使を給ひて、「かの鎧は忌はしう見ゆめり。そこに持たらんには、身を失ふこと遠からじ。とく売り捨てね。されど、こなたざまにあらんは、なほ良からず。よすがもとめ出て敵のものにせよ」となん、②ねもごろに聞こえ給ひければ、九郎「つつしみて受け賜ばりぬ」とて、又ことなる鎧の、色あひ・為様同じきを着て出たり。朝臣、「なほ先の日の物なりや。さしもいましめつる物を」とむつかりて仰せ賜びたり。「いな、そは仰せのままに着侍らず。Aこはこと物なり」と申す。「さかし。されどなほ忌々しう見ゆ。こも先のごとせよ」となん宣びたれば、後の日は引きかへて、黒き革をもて作りて、見立なく、いといと古びたるを着たりけるに、「Bそれこそめでたうは見ゆれ」と褒め給ひぬ。

後に九郎、「その忌はしきかたちを、つばらに伝へ給ひねY」と申す時に、「いな、物の具に身を失ふべき姿とてはなけれど、よしなきことに宝をつひやし、うるはしだちてものするは、国のおとろへとなりぬべし。若き者らは、こをよきことに思ひ、うらやみてまねばんには、年ごとのなりはひ足らで、家貧しうなりもて行きつつ、よき従者をも養ふべき手力なからまし。さてぞ敵にむかひて滅びやすかんなり」と教へ給ひければ、人みな身にしみておぼえけりとや。

ただ、鎧は札よきがよかんなり。弓は返らずともその力にかなひ、太刀・長刀は金よく鍛ひて、物の骨切るるを是とせん。馬は丈劣るとも、遠きに疲れず、癖なく、いちはやう手縄に従ふを選ぶべし。はた、大かた物の具のきらきらしきは、敵まづ眼につけてかかるほどに、思はず身をも失ふべかんめり。

（伴蒿蹊『訳文童喩』）

（注）○こなたざま……味方。　○為様……仕立てかた。　○さかし……そうであるか。　○見立なく……見映えのしない。
○物の具……武具。とくに鎧。　○なりはひ足らで……家計が追いつかず。　○手力……腕力。ここでは財力の意。
○札……鎧の材料となるもの。　○弓は返らずとも……矢を射たときに、その余勢で弓が回転しなくても。
○金……金属部分。　○手縄……馬の轡（くつわ）につけて引くための縄。

問1　傍線部①②を現代語訳せよ。

問2　傍線部X・Yを、例にならって文法的に説明せよ。

〈例〉過去の助動詞「き」の連体形

問3　傍線部A「こはこと物なり」とあるが、頼義はどのような指摘をし、それに対して九郎はどのように答えたのか。文脈に即して説明せよ。

問4　傍線部B「それこそめでたうは見ゆれ」とあるが、このように頼義が言ったのはなぜか。九郎の出で立ちが、味方にどのような影響をもたらすと考えていたかに留意しながら説明せよ。

問5　最終段落において、

ア、武具や馬を選ぶとき、どのような点に気をつけるべきと言っているか。簡潔に答えよ。

イ、なぜその点に気をつけるべきと言っているのか。本文に即して答えよ。

三　次の文章は、『別本八重葎』の一節である。姫君の屋敷に、かつて恋仲だった男君が久々に訪れて来たが、姫君は急な発熱のため対面できず、彼女に仕える女房の侍従は、男君を夜明け前に帰らせた。これを読んで、後の問いに答えよ。（30点）

夜も明けぬ。姫君、なほいと苦しげにせさせ給ひて、御粥などをもふれさせ給はず、起きもあがらせ給はぬに、御文あり。御使ひは蓑虫のやうにて、まうで来たり。侍従ぞ取りて見る。「昨夜は置きたる露も①払はむかたなくて辛かりきや。

雨もよに来れど逢はねば濡れつつぞ我は来にける道の長手を

A昨夜は帰る、今宵さは」など、多くて、濃き緑の紙の、あやしく香ばしきに書い給へり。御返りなど、ましてあるべうもあらぬ御さまなれば、侍従ぞ聞こゆる。「昨夜はいかなる御便りにか。

明けぐれのうはの空より降る雨を帰る袖には託たざらなむ

夢現とは」など口疾くて、おし包みて取らせつ。

今宵ばかりは、なほ御対面あらむやうなどを言ひあはするほどに、山の阿闍梨の君、この頃、院の悩ましくせさせ給ふ御祈りに請じ下ろさせ給ふが、Bふとまうで給へり。さし覗き給ふより、うち見まはし給ひて、「この宮には、例ならぬ病者などやある」と問はせ給ふ。人々、姫君の昨夜より悩ましうせさせ給ふよし申すを、「さりや。よからぬものの気配するを見つければ、まかり過ぎがたくて、まうでつるなり。いかなる御悩みにか」など問はせ給ふほどに、御几帳のはづれに、ありつる御文の巻かれたるを、目敏に見つけ給ひて、「これ、まづよからぬものなり」とて、取らせ給ふを見れば、大きやかなる蓮葉なりけり。C侍従、頭の毛も立ちて、「いかなるに」とわななき言ふを、「かかるもの、いかにしてか気近う参り来つる」と問はせ給ふ。

姫君も、この君おはしましつるを聞かせ給ひて、からうして御頭もたげさせ給ふ。阿闍梨の君、近く寄りおはすに、侍従、昨夜のことわななかしいでたり。君、「いで、そこたちのものはかなきに、悪しきものの②所得てふるまふにこそあれ。かううち荒れて人気少なき所には、狐などいふ獣らも、人の魂を侵し謀るわざするなり。悪しくしては、取られもするなり」など、すくよかにのたまへば、姫君は③むくつけく恐ろしと思す。老人どもは、こなたに寄り来て、「あが仏、この難助けさせ給へ」と、手

を押しすりつつ怖ぢあへり。「今宵は、居明して経読みはべらむ。人々、姫君の御あたり去らずものし給へ」などのたまふ。

日暮れゆくままに、雨もうちしきるに、阿闍梨の君、夜居の僧になり給ひて、声はいと尊くて、仁王経読み給ふ。人々は、この君ひとりを高き山と頼みて、御几帳のあたりに頭を集へつつ、わななき居たり。夜中うち過ぐるほどに、風さへ荒々しう吹き出でぬれば、「変化の物、『今宵来む』と言ひつるを」と、あるかぎり生ける心地もせず。ただこの枕上に、物の音ひしひしと聞こえて、ここかしこの障子なども、揺るがし開くるやうに思ゆ。されど、かくて御守り強くおはしますけにや、ことなることもなくて、夜も明けゆくに、少し慰めて、姫君も起き居給へり。「この君おはしまさずは、ほとほと鬼一口に食はるべかりけり」と思ふに、なほ恐ろしきことかぎりなし。

（注）○雨もよに……雨がひっきりなしに降るうちに。　○道の長手……長い道のり。
○多くて……愛情深い言葉が他にも書いてあって。　○御便り……お出かけのついで。
○うはの空より降る雨……あなたが上の空で帰るときに降った雨。　○帰る袖……逢えずに帰る際の涙で濡れた袖。
○夢現とは……あなたの昨夜のお越しが夢だったのか、現実だったのかは今夜判明するでしょう、の意。
○院……上皇。　○侵し謀る……取り憑いて惑わす。　○あが仏……頼るべき人への呼びかけの語。
○夜居の僧……夜を徹してお護りする僧。　○高き山と頼みて……頼みの綱としてすがって。
○鬼一口に食はる……「鬼はや一口に食ひてけり……見れば率て来し女もなし」（『伊勢物語』）による表現。

問1　傍線部①～③を現代語訳せよ。

問2　傍線部A「昨夜は帰る、今宵さは」は、次の和歌による表現である。これを踏まえて、男君が傍線部Aで訴えている内容を、現代語で述べよ。

ぬばたまの昨夜（きぞ）は帰しつ今夜（こよひ）さへ我（あれ）を帰すな道の長手を（『万葉集』巻第四・相聞）

問3　傍線部B「ふとまうで給へり」とあるが、阿闍梨の君が急に姫君の屋敷へ立ち寄った理由を述べよ。

問4　傍線部C「侍従、頭の毛も立ちて」とあるが、なぜ侍従はそのような状態になったのか、理由を説明せよ。

問5　傍線部D「この君おはしまさずは、ほとほと鬼一口に食はるべかりけり」とあるが、阿闍梨の君がいたことによって、どのような事態を防ぐことができたのか、本文に即して説明せよ。

四 江戸時代、天明八年の京都での火事について記した次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、設問の都合で返り点、送り仮名を省いたところがある。（45点）

京師戊申ノ火、十万家一時ニ灰燼ス。繒賈某染レ疫ニ大熱、アリテ不レ諳ニ人事ヲ。①火逼セマレバ、家人周章シ、納メヲ某ノ櫝ニ、舁キテ送リテ野外ニ、帰リテ再ビ運ビテ貨物ヲ、無シ守ルヲ櫝者。②有リ偸ノ児ノ至ルニ、欲スレ啓カントスルモ之ヲ、為ニ其ノ加フルガヲ鍵、因リテ以テ斧ヲ砕クレ蓋ヲ。見テ中ニ有ルヲ人、大イニ駭オドロキ逸ス去。某ノ聞キヲレ響キヲ驚キ醒メ、挙ゲテレ頭ヲ一望スレバ、猛エン焔ガシ焦レ天ヲ、黒煙四ニ散ス。又タ聞クニ万人ノ号ドウスルヲ慟ヲ声ニ。大イニ懼オソレテ念オモフ、「既ニ死シテ来レリ地獄ニ。③鬼卒ⓐ已ニ破リテレ棺ヲ去レリ。恐ラクハⓑ復タ来リテ捽セツ去セント。」勉強シテ出ヅレ櫝ヲ。隠隠トシテ見ルニ林際ノ灯光ヲ、似タリレ是ニ仏灯ニ。蹩躠サツシテ以テ就カバレ之ニ、則チ一堂宇ナリ。見ルニ上ニ坐シ閻王ニ、気象威猛ナルヲ。ⓒ乃チ匍ホ匐フクシテ階下ニ曰ク、「某生前無シ大過ニ、願ハクハ度ドセンコトヲ極楽ニ。」王ノ獰ドウ目モクシテ、不レ発セ一語ニ。ⓓ益マレ怖レ祈命ス。④傍ニ有リ老叟

亦避火者。謂曰、「君顛乎。」⑤因語以夜来大焼事。此時某汗流
熱除、神気涼爽。夜亦向曙。拭眼諦視、則千本閻魔堂也。
⑥始知家人以臥病、舁出而到之。鬼卒即偸児也。

（寺崎蛟洲『蛟洲餘珠』による）

（注）

灰燼　＝ものが焼けてなくなる。
繒賈　＝絹織物の商人。
周章　＝あわて、うろたえる。
櫝　＝大型の箱。
偸児　＝どろぼう。
逸去　＝走って逃げ去る。
号慟　＝大声で泣き叫ぶ。
鬼卒　＝地獄の役人、看守。
捽去　＝つかまえて、つれていく。
勉強　＝むりやりに。
蹩躠　＝腹ばいではって進む。
堂宇　＝寺社の大きな建物。
閻王　＝地獄を司る王、閻魔大王。
気象　＝風格、心意気。
匍伏　＝ひれ伏す。
度　＝悟りの世界に達する。
獰目　＝凶悪な目つき。
老叟　＝老人。
顛　＝気が狂う。
神気　＝精神。
諦視　＝注意してよく見る。
千本閻魔堂＝本尊に閻魔大王を祀った寺院。

問1 傍線部①「家人周章、納某櫝、舁送野外、帰再運貨物、無守櫝者。」を、わかりやすく現代語訳せよ。

問2 傍線部②「大駭逸去。」について、誰がなぜそのようにしたのか。主語を明らかにしてわかりやすく説明せよ。

問3 傍線部③「既死来地獄。」について、繒賈の某はなぜそう思ったのか。句読点も含めて六十字以内で説明せよ。

問4 傍線部④「傍有老叟亦避火者。」を、漢字仮名交じりの書き下し文に改めよ（現代仮名づかいでもよい）。

問5 傍線部⑤「因語以夜来大焼事。」を、漢字仮名交じりの書き下し文に改めよ（現代仮名づかいでもよい）。

問6 傍線部⑥「始知」について、何を始めて知ったのか。その内容をわかりやすく述べよ。

問7 波線部ⓐ「已」、ⓑ「復」、ⓒ「乃」、ⓓ「益」の読み方を、送り仮名も含めてすべてひらがなで記せ（現代仮名づかいでもよい）。